

「巖島奉納集(初編～三編)」寸見

— 倉橋連の動向 —

朝倉 尚*

はじめに

神の島として、あるいは海上交通・交易の要衝として栄えた宮島(巖島)は、当初より文芸の世界にそれほど頻繁に登場した訳ではない。巖島神社が平清盛を頂点とした平家一門の信仰を得て以来、急速に脚光を浴びることになる。が、いかにしても文芸・文壇の中心は京洛であり、江戸であり、浪花であり、安芸国宮島の地はこれらから遠きに過ぎた。そこで、宮島が文芸の世界に登場するについては、神の島として、景勝の地として、参詣のための紀行や物見遊山の対象に選ばれることもあったが、例えば熊野や伊勢などと比較する時には、その規模においてはよほど小さい。が、巖島神社は安芸一国にとっては疑うべくもない鎮守社・一の宮であり、とくに歴代の国守である毛利・福島・浅野の各氏は、こぞって師檀関係を結び、神社を尊崇した。時代が降るにつれ、士・農・工・商という身分的な隔てにかかわりなく、安芸国第一の参詣・遊山の対象地として定着した。それらのことを証する一つとして、神社に奉納された文芸が多く現存することがあげられる。

本稿で取り上げるのは、俳諧作品集の奉納である。そもそも奉納の形態にも、大きく二つがある。一つは、すでに成立した作品集を、自らの技量のさらなる向上と大成、集の末代までの繁栄、俳諧のさらなる隆盛などを祈念し、奉納する場合である。いわば目的を達成するための手段としての奉納である。これに対してもう一つは、本稿の「巖島奉納集」のごとく、巖島神社への奉納を目的として集が編纂されている場合である。

巖島神社への奉納を目的とした俳諧作品集の例

は多くない。「巖島奉納集」は、すでに筆者も紹介したことがある『巖島八景』と、双璧をなすと言えよう(注)。ただし、『巖島八景』における俳諧は、漢詩・和歌・連歌とともに選ばれていた。これに対して「巖島奉納集」は俳諧専一の選集であり、編纂の企ては三編までで中絶したが、その規模は他に例を見ない。

「巖島奉納集」の編纂は、有力門人の全面的な助勢を得て、飯田篤老が行なう。飯田篤老(1778-1826)の本名は、同完蔵利矩である。篤老は俳号であり、別に太一・田禾・石兮・六々堂・国華童子・老園などの号をも用いた。「巖島奉納集」は、篤老が死去したために、初編より三編までが刊行され、中絶する。が、『巖島奉納集三編』の奥付けによれば、五編までの続刊が予告されている。

- 注 ①『「巖島八景」考—正徳年間の動向—』(『瀬戸内海地域史研究』第2輯, 文献出版, 平成元)
- ②『「巖島八景」考—野坡と芸備地方俳諧—』(『瀬戸内海地域史研究』第4輯, 文献出版, 平成4)
- ③『「巖島八景」考—巖島連歌壇の動向—』(『瀬戸内海地域史研究』第5輯, 文献出版, 平成6)
- ④『宮島の文芸』(『芸備地方史研究』第207・208号, 平成9)

(1) 倉橋連と篤老

本稿で言うところの「倉橋」「倉橋島」は、特に現在の広島県安芸郡倉橋町を指す。精確には、倉橋島の南部と、付属の島々である。さらに、「倉橋連」については、現倉橋町域で俳諧を愛好した俳人の結社を指すこともあったが、その中心をなす本体は本浦の俳人の結社である。

*広島大学・総合科学部広域文化研究講座

倉橋における俳諧の普及・流布がいつの頃から始まったのか、確乎としたことは言えない。が、現存する文書や作品集に拠るかぎりでは、それほど遠くまで遡ることはできない。近世の後期、幕末にかけて爆発的に流行した観がある。当時の状況を物語るこの方面の文書や作品を、現在にいたるまで豊富に襲蔵されるのは、当代において組頭や庄屋などの村役人を勤めた瀬越家(現、尾曾越家。岡山市在住)である。次には、事に当たった当家の該当歴代を、参考までに図示する。

瀬越雅休 (1771-1820)⁵⁰

文助

号、斗山

|

雅俊 (1801-53)⁵³

正之助

号、篤民、黙々齋

|

正義 (1821-60)⁴⁰

力太郎。実は雅俊の甥

妻の丞は雅俊の女

号、長洲、松圃、雨春庵

|

正邦 (1842-)

陶助。実は、雅俊の息男

正義と従兄弟

号、石年、鶴年

それぞれが比較的短命であったためもあり、正之助雅俊を中心に言えば、53年の生涯の間に四代の当主が生存したことになる。各当主についてはそれぞれ生前の行状を記した小冊子が遺される。この中で、雅俊の文芸面における活動で目を牽くのが、俳諧への関心と、従事とである。『尾曾越篤民家大人伝』(同正邦撰)より、関係分を抄出する。

俳諧ハ廣島藩士篤老宗匠ニ就キ之ヲ習熟セリ。上記は、「学事の経歴」を記した部分よりの抄出である。俳諧については、飯田篤老を師としたことが表明される。

一、文政二年卯二月十二日ヨリ三月三日マテ^ノ滞留^ヲ、

筵〔筵〕史宗匠来遊ニテ篤民ト両吟ニテ、三十六句俳諧ナルヲ興行セラレタリ。

一、同年三月廿八日、庚申待集會ニテ興行。

斗山翁 拾貝 魚目 南涯 篤民翁 東黎 巨江 維鵬 也来 佳又

十名ニテ三十六句ノ俳諧ヲ興行セラレタリ。

一、同年四月十九日、啄木菴ニテ玄蛙・篤民翁二吟ニテ、三十六句ノ俳諧ヲ興行セラレタリ。

一、同年六月廿日ヨリ、文瓶亭ニテ両吟、廿四日調フ。

備後三次住行脚万羽ト篤民翁ト、十八句ノ俳諧ヲ興行セラレタリ。

伝の作者・正邦は実父でもある雅俊の各方面ごとの経歴を列举するが、俳諧における経歴・俳歴をも特別に取り上げようとしている。ただし、上記の四条を記述した後、余白を残したままで中断しているのは、これ以後の活動についてはあまりに多岐・頻繁であるために、整理して記述するまでに至らなかったと解するべきであろう。いずれにしても、俳人篤民としての雅俊の活動は、文政二年(1819)より始まったようである。時に雅俊は19歳であった。

第一条では、2月12日から3月3日まで筵史が来島、この間に、筵史と篤民は両吟で36句(歌仙)の俳諧連句に興ずることがあった。筵史の滞留は20日間にも及び、連日のように句会が開かれ、指導がなされたと解される。篤民のばあいも、これを機会に筵史の門弟の列にも加えられることになったのではないかと想像する。この段階では、篤老との直接の接触は不明である。

第二条では、同3月28日に庚申待を期して、歌仙の俳諧連句を興行している。連衆は10員で、いずれも倉橋の俳人である。来島の宗匠の指導を仰ぐことなく、自力で会を興行、維持することが可能であったことを示す。文政二年当時においては、俳諧の結社としてすでに「倉橋連」が結成されており、前出の斗山以下の10員はその主要構成員であった。

第三条では、同4月19日に啄木菴において、玄蛙と篤民と両吟による歌仙の俳諧連句が興行されている。2月から3月にかけて来島した筵史の後

をうけ、その師である玄蛙が乗り出していることを知る。篤民はここでも門弟としての指導を仰いだようである。

第四条では、二つの俳諧の会の興行が記される。一つは、6月20日より同24日にかけて、文瓶亭において興行された、両吟の俳諧連句であり、一つは三次の宗匠で行脚途次の万羽との、両吟の俳諧半歌仙(16句)連句である。なお、後者については、行の頭初より記され、独立した記事のようにも見える。あるいは「一」字の脱落かもしれない。

倉橋連・篤民は短期間の間に、筵史・玄蛙・万羽を迎え、矢継ぎ早に会を興行している。この文政二年の動向は何を意味するのであろうか。玄蛙(1762-1835)は、山県郡有田村の人で、生家は代々医を業とした。広島に出て俳諧に専念、師の六合に認められ、多賀庵を継承して三世となる。筵史(1773-1846)は、広島の人で、六合の養子となる。文政五年、玄蛙より譲られ、多賀庵四世を継いでいる。この多賀庵を相承した両宗匠の来島目的の一つは、おそらくは当年末に刊行される筵史編『さゝれいし』を撰集するための指導であったろう。両宗匠にとっては、集句のための活動であり、あるいは入集を周旋する代償として刊行するための資金を得るためであったかもしれない。倉橋の俳人は、経済的な面で、その期待に応え得る実力と資格を有していた。

筵史編『さゝれいし』への倉橋島の俳人の入集は、以下のごとくである。(句頭の番号については、発句について私の施したものである)

- 24 敷島の櫻咲けり(温繁) 温繁拾貝
 25 ねはん會やけふの日和の新しき 斗山
 (以上2句、神釋)
 36 つゝ、かなく二月に入や梅柳 圭甫
 (月並)
 64 春雨や壁となりから高笑ひ 魚目
 65 碁の音に狐も来るや春の雨 也籟
 (以上2句、降もの)
 99 鶴の来て草くハへけり春の水 南涯
 (水)
 128 明渡る朝のけしきや更衣 染滷(鹿老渡)
 (衣るい)

- 175 しら魚やつくへ見れはめのかたち 雨夕(鹿老渡)
 (魚)
 192 草の葉のおもてにまはる蜚かな 鹿角(鹿老渡)
 (虫)
 200 くさむらにかくすや鹿の落し角 幾石(クラハシ)
 (獸)
 229 碓を居し處やすミれくさ 赤雄(クラハシ)
 232 草つみや心へ春のいろ 一路(クラハシ)
 233 執着の預處やけしの花 維朋
 (以上3句、艸)
 291 藪かけにとしを咲越椿かな 東黎(クラハシ)
 292 去年から今に咲たる椿哉 巨江
 293 思ふより三日おくれし木の芽哉 五湖(クラハシ)
 300 鐘つけはひく色あり夕さくら 佳又(クラハシ)
 301 日の前や花にして置朝の雲 梅雨(鹿老渡)
 305 手放せハ鳥の来てふむ接木哉 篤民(クラハシ)
 308 水の氣のほる夕へやなしの花 亀甫(鹿老渡)
 (以上7句、木)

登載の順に紹介したが、いずれも1句のみの入集ながら、20員もの俳人を数えることができる。也来は也籟の改号、維鵬と維朋とは同一人と解すれば、20員の中に前掲の庚申待の集会における歌仙連句の10員の連衆がすべて含まれることになる。筵史の滞在日数が示唆するが、両宗匠の来島による集句活動が広範にわたり、活発であったことが知られる。なお、両宗匠の来島が、それまで何の因縁もない未知の地に対してなされたとは考え難い。相次いだ来島は、それまでの蓄積を踏まえた上での、かなり緊急な必要性、あるいは強固な意欲の現われと解される。この点から言えば、篤民にとっては父・雅休の斗山が入集していることに注目する。筵史・玄蛙の来島は、篤民よりは、むしろ斗山などの世代への要請が目的ではなかったか。雅俊の行状に特記されるのは、篤民にとっては斯界の著名な宗匠と一座し、特に直接に作句・付合の指導を受けながら、あるいは俳壇の間に喧伝される可能性を有する両吟の一卷を完成することは、名誉なことであった。斯界の晴れの会への初登場を意味したものと解される。

『さゝれいし』への入集句で注目されるさらなる一つは、「クラハシ」のほかに「鹿老渡」の連衆

の句が入集することである。「クラハシ」連の15員に比較すれば、「鹿老渡」連の5員は、規模の上からは小さい。が、鹿老渡が文化面においても独立した集合体として成長していたことが判明する。したがって、筵史・玄蛙の来島も、「クラハシ」・本浦から鹿老渡にも及んでいたことが想像される。

玄蛙や筵史が領袖として主導した多賀庵の俳諧は

芭蕉—野坡—^{開創}風律—^{二世}六合—^{三世}玄蛙—^{四世}筵史—

のように相承している。芸備地方に流布・普及した俳諧の第一は、蕉門は野坡流の俳諧であり、野坡の門弟風律が開創した多賀庵の俳諧は、当地方のいわば本流をなすものであった。が、三世、四世と相承するにつれて、その旧態依然の句風に対し、しだいに飽き足らないものを感じ始めたようである。この時期に登場するのが飯田篤老(1778-1826)である。篤老、飯田完蔵利矩は、広島藩士の長男に生まれたが、生来が病弱・多病のために、若くして一旦は家を去る。上洛して高桑闌更に師事し、諸国放浪ののちに、家督を継ぐために帰国した。帰広の後、芸備俳壇に新風を吹き込むことになり、一躍この時代の寵児として迎えられた。篤老園を開創し、しだいに多くの門人を擁することになる。

倉橋島の連衆(倉橋連)も、結果的には多賀庵の宗匠以上に、篤老に親炙した。篤老も、時期は不明であるが来島し、指導を施したようである。雅俊について言えば、篤民の俳号は、篤老を仰慕の余りの命名ではないかと推される。頼越家には、『さゝのひとふし^{書畫}』と題された書画帖が残されるが、その冒頭を飾って篤老は、

^(印1)士官の富貴は、元日の登城に、武具馬具のうるハしき。農家の富貴は、早稲晩稲山の如く蒞入たる。工の富貴ハ、六月の炎天に、大藏の壁乾上りて、棟上の幣涼風に翻る。商人の富貴は、としのくれの天秤たえまなくたゝき立て、懸乞の出入門前市をなす。

堯舜の 代や人に餅 松に鶴

舊作一章を記して、書画帖の序に換

篤_(印2)老

と記している。印1は「國華童子」、印2は「薦老園」である。篤の字と、薦の字は通用させたようであるが、篤民もしばしば「薦民」と署している。なお、右の篤老の句は、波木井昇斎(1808-62)が盆に彫刻しても、同家に襲蔵される。句盆は、篤老の句に因んで、背景に松を彫る。さらに、篤老の句とともに、京洛の俳諧宗匠で同時期に芸備にも下向している、梅室の「三更句歌 月光新」と題した「あらためて照や今宵八人の月」句を刻している。いずれにしても、篤老が同家を訪れた記念として製された作品と解される。

篤老の頼越家に対する指導の一端は、同家に所蔵される上記の作品をはじめとして、家人の句作草稿に対する批点、添削によっても知られる。ついでには、篤老の他の倉橋連に対する指導も、同様であったと推される。そして、篤老がとりわけ熱心に指導し、期待したのは、林直温の也籟であった。このあたりの事情について、間接的ながら示しているのが、篤老の編纂した作品集であるように思う。例えば、篤老の代表的な編纂事業の一つに、「巖島奉納集」がある。「巖島奉納集」は、初編より三篇までが刊行され、篤老の死去が因で、遺憾ながら四編以下は未刊になっているが、既刊の三編における倉橋の連衆の出句状況を比較すると、各編において明らかに様相が異なっている。倉橋の連衆が篤老に急速に接近し、影響・指導されて、その門下に組み込まれている過程が反映されているように思われる。

本稿では、以下において「巖島奉納集」の性格を明らかにすると同時に、瀬戸内島嶼部の一地方俳諧集団・倉橋連の関わり方について明らかにしたい。巖島神社に奉納することが目的で編纂された「巖島奉納集」に、倉橋連がいかに関与し、それが何を意味するかについて究明することになる。

一 『巖島奉納集初編』

『巖島奉納集初編』は、『文教国文学』第26号(広島文教女子大学国文学会、平3・3)に櫻井武次郎「翻刻・巖島奉納集初編」として全容が紹介されている。表紙中央の題簽は「巖島奉納集初

編」であるが、本稿では「巖島奉納集初編」と表記する。集は、春・夏・秋・冬の四季の部に分かれ、それぞれの部に秀吟を収める体裁を採る。各部の冒頭には、標題に次いで、「篤老園撰」として、さらに「門人^{路宅}稲^焉著」と署する。編纂の動機については後述するが、門人の路宅と稲焉の協力を得て、篤老が選進した集である。

(構成)

各部の構成は次のごとくである。

春之部			夏之部		
其一～三	発句	76	其一～三	発句	89
其四～六	一折	三	其四	表六句	一
其七	一順	一	其五・六	一折	二
其八	歌仙	一	其七・八	歌仙	二
秋之部			冬之部		
其一～三	発句	61	其一～三	発句	53
其四・五	歌仙	二	其四	一折	一
其六・七	一折	二	其五・六	歌仙	二

注1. 作品の各まとまりごとに、其一、其二のように標題する。

2. 表六句、一順、一折、歌仙は、それぞれ6句、座衆各1句、18句、36句の連句である。

発句の合計は279句、連句の合計は17巻である。発句の句数が比較的少く、連句の入集が優遇されている。

(編纂の動機・目的)

『巖島奉納集初編』は、いわば大成・全集として企画された「巖島奉納集」の第一冊であり、その編纂の動機や目的は続刊の書冊の性格を規定し得るものであり、重要な意味を有する。そこで注目されるのは序文である。

『巖島奉納集初編』の序文は、篤老の門人である、稲焉の手によって成る。少しく長文であるが、全文を引用する。

わが輩天が下に有とある俳諧の発句十万余句をあつめて、わが師篤老園主人の撰にあて、それが中なる一千句を抽出て、額上にしるし巖嶋大明神の廣前にさゝげ、それにもれたる高判の

句、も、かたのごとく冊子にあらはし、なほこれに残りたるくさへ世に反古といふものらまで、大小ふたつの筥にひめ、おなじ社にます御文庫におさめ奉らバやと思ひたちぬる因縁いかにといふに、篤老園主人をさなきより病がちに、たづか弓矢なミつくらふ術いかゞあらんと、はやくよりわが国を出て、ミヤこ東山なる關更翁につかへ、蕉門俳諧の蘊奥をうかゞひ、東西三十余國を漫遊し、十とせ余りを経て此国にかへられけるが、多年の病ひすこぶるおこたり、再び武門に入て飯田氏を継れけるに、まもなくいミじき病おこり、足なへふむ事あたハざりしを、わが師をはじめ年ごろうやまひまつり奉るいつきしま明神に折申されければ、其しるしいちじろく、薬効ともにあらはれ、昔にまさりたるますらをとなられけるに、いで神楽まをさん料に、おのれらがすけるわざによりて神慮をなぐさめまゐらせんとて、かゝることにハおよべりしなり。

十萬の大願いまだ半にミたず、一千の額上いまに宿望を遂ずといへども、まづ此冊子第一編をあらはし、とみに四方の好士に告て、わが輩の志をたすけ、ともにその力をあはせて、不日に成就圓滿の時来らん事をまつといふよしを、おなじ國中のむらなる農夫稲焉つゝしミ記す。

文化九年壬申正月

注1. 句読点は私に施した。

2. 濁音に限り、特に濁点を付した。

序文に特有の文体で、全体は二文より成る。

第一文は、前半部で「巖島奉納集」編纂の目的を記している。これによれば、俳諧道に従事する俳人の発句十万余句を集める。これは稲焉をはじめ、路宅が中心になって行なう任務である。集めた句は、師である篤老園主人の篤老が選定する。そして、まず第一には極上の一千句を抽出して、額上に印刻し、巖嶋大明神・巖嶋神社の社頭に掲げる。第二に、この選に漏れた句で、しかしながら高判を得た句々については、例に倣って冊子として刊行する。さらに、第三には、選に入らない残りの句についても、句反古にいたるまで、大小二つの箱に収め、神社の文庫である名山蔵に奉納

される予定であった。

第一文の後半部では、右の目的・企画を発想した因縁(動機)について記す。同時に篤老の俳歴が略述される。篤老は、幼少より病弱であり、武家を後継することに懐疑し、早くより郷関・安芸国を出る。上洛しては、東山の芭蕉堂關更の門下に入り、鍛錬を積んでいる。後、諸国を漫遊すること東西三十余国に及び、十余年を経て帰国している。行脚の一方の効用によるか、多年の病弱が解消し、健康を得て再び安芸藩士飯田利矩として家をも後継するが、まもなく重度の足疾を患う。この時にあたり、篤老をはじめその門弟子にいたるまで、年来敬仰した巖島明神を祈願したところ、その効験は著しく、薬石の効と相俟って、昔に劣らぬ健康を回復する。そこで、神恩に謝するため、篤老以下が愛好する俳諧を奉納することで、神慮を慰めようとしたとする。篤老園門下の企画の動機は、師である篤老の足疾快癒祈願の満願を記念するためであった。

第二文では、『巖島奉納集初編』刊行の経緯と意図を記している。十萬句の集句予定の半数にも及ばず、一千句の掲額もならない現状ながら、取り敢えず初編を刊行することにより、篤老園門下の巖島神社への俳諧奉納の企画を、四方の好士に速やかに徹底し、これに対する支援、協力を得ることにより、日ならず所期の目標を円満に成就する時の到来を待つ由を述べる。なお、初編の巻末には、「巖島奉納集」の第二編と第三編とが、それぞれ近刻、嗣出として予告されている。

稲焉の序文は「文化九年壬申正月」に製されている。巻末の刊記に「文化九年壬申睦月」とあるのと符合する。『巖島奉納集初編』の刊行は、文化9年(1812)正月であった。

(撰者・作者)

『巖島奉納集初編』は、門人の路宅と稲焉の全面的な協力を得て、篤老が選進した集である。

篤老は、前掲のごとく、上洛して東山は高台寺の辺りの芭蕉堂を開創した高桑關更(1726-98)の門に投じている。關更に親侍した期間はそれほど長くはない。が、芭蕉堂の機関句集『花供養』が既成の流派に関係なく各地の俳人の句を載せて

いるのに象徴されるように、篤老は關更の一種自由平俗な俳風に魅かれ、柔軟な結社運営に共感したようである。帰国後の篤老は、この新感覚の俳風と結社運営で、次第に同志を集め、門弟を増加させる。篤老園の俳諧は、多賀庵の俳諧とも深い関わりを有しながら、しだいに独自の勢力として成長した。

路宅は、俗名は山城屋清兵衛、広島の人である。初めは多賀庵二世の六合の門下にあったが、後に篤老門に入り、その有力な後援者の一人となる。文化7年には自らも『復古供養』を選進している。

稲焉は、俗名は野間藤右衛門で、安芸郡中野村の人である。序文を「おなじ國中のむらなる農夫稲焉つゝしミ記す」と結ぶように、当村の庄屋を務めた。野間家は代々の豪農であり、当人ははじめ關更を後継した芭蕉堂二世の成田蒼虬(1761-1842)の門下に入るが、後に篤老門人として活動する。路宅とともに、篤老にとって有力な後援者であった。惜しむらくは28歳という若さで、初編刊行の翌翌年の文化11年5月18日に死去したことである。

入集した句の作者については、その句数、あるいは所属する俳壇・結社の地域分布や性格などを検討するべきである。篤老が統率する篤老園とその俳風が影響を及ぼしている範囲が明らかになるのではないかと考えられる。が、実際には、事はそれほど簡単ではない。むしろ、全国的な広がり度で句が集められていること、特定地域や個人(除、広島)の句を突出して多数収めることを避けていること、芸備では広島以外の俳人の句を中心にして、近隣の連衆の句が比較的少ないことなどが特徴であるように見受けられる。これらは、稲焉の序文に記されたように、「巖島奉納集」の企画を喧伝し、事業の遂行を円滑に運ぶための配慮のように解される。

帰国後の篤老は、芸備俳壇に地歩を築くための当初の活動として、少数で精鋭の同志を募り、「大鳴社」を結成して、その盟主に任じた。同社の盟友の入集の状況は以下である。(括弧内の左側の算用数字が発句数、右側の漢数字は連句の巻数を示す。以下同じ)

篤老(1・五)、夏雲(2・一)、槐児(2・一)、
月章(2・一)、春平(1・一)、馬川(2・×)
盟主の篤老からして、発句の入集は一首に過ぎない。ただし、自らが指導した連句については五巻が入集し、盟主・編纂者としての存在感を示している。夏雲以下の社友については、発句2句、連句一卷が平均となっている。なお、結成以来の盟友である素白の入集が見られないのが少しく不審である。

稲焉とともに篤老の側近として、物心両面において支援した路宅は、別に雨屋と号し、広島「雨組」の主催者でもあった。篤老も雨組の構成員の一人である。10員の中で入集が認められるのは、
路宅(3・二)、篤老(1・五)、宇柏(2・×)、
敏彦(1・×)
である。4員のほかの雨砌・景和・芝童・松宇・素圭・立丁については認め難い。路宅ははじめ多賀庵二世の六合の門下であった。敏彦は、六合の高弟で、六合の養子で後に多賀庵四世を後継する筈史の指導を託されている。雨組は、流派的には開放されており、篤老門の影響力が二の次であったことを示しているようか。

篤老の有力門人の入集としては、
稲焉(3・一)、甘古(4・一)
がある。稲焉の連句の一卷(夏の部・其八)は、「訪稲焉」と題された、篤老と路宅との三吟歌仙である。稲焉はこのほかに序文を製した。弟の五由(後、たゝか)も発句一句が入集する。平田甘古は稲焉に代わり、「巖島奉納集」の続編の編纂に協力することになる。このほか、
何有(3・×)、桂羅(3・×)、梧来(3・×)、
十六(4・一)、由之(3・×)、嵐夕(3・一)
などについても、広島とその周辺の俳人で、3句(巻)以上が入集している。何有はヤハタ(八幡)、十六はイツクシマ(巖島)の連衆である。

諸国俳人の入集句で、3句(巻)以上認められるのは、
鶯亭(三河、3・×)、乙都留(西近江、4・×)、
丘高(伊勢、2・一)、省我(伊勢、5・二)、
植ふる(相模、3・×)、麦太(行脚、1・四)、
文年(伊勢、4・×)、眠石(肥後、3・×)、

野渡(伊勢、2・一)
などである。伊勢神宮との関連は定かではないが、伊勢国の俳人が優遇されている。刀射(4・×)や椿堂(3・一)なども、句の配列から推して、同国の俳人であると解される。前者は女流俳人である。2句以下の諸国俳人については、多数が認められる。春の部・其一の巻頭を飾る柏茂については、丹後国の俳人で、発句二句の入集である。篤老の師である關更の入集は欠くが、關更の高弟である蒼虬の句は「京」の俳人として一句入集する。

編者、あるいは篤老門下が他流派の俳人を排除していないことは、これまでの検討でも明らかであろう。多賀庵や養花園を代表する俳人も、
玄蛙(1・×)、鳳山(2・×)、古江(1・一)
のように、句数は多くないが入集する。
(倉橋連の動向)

倉橋連の入集は認められない。
(巖島の句)
「巖島奉納集」は巖島神社に奉納することを目的として編纂されている。が、集に収載される句がすべて巖島と巖島神社とを対象に製されている訳ではない。ただし、集が巖島神社に奉納される以上は、巖島や神社とまったく無縁の句ばかりを収載する訳にもいかなかったであろう。巖島明神の法楽のためには、巖島や神社を敬崇・称美する句も必要であった。

巖島連の入集としては次が認められる。
其友(1・×)、十六(4・一)、竹虎(1・×)
十六が優遇されている。連句一卷(春の部・其八)は、広島の篤老・梧来・嵐夕との四吟歌仙である(発句は嵐夕)。

巖島、巖島神社を詠出する句を掲げる。
日帰りに行や子日の巖島 ヒロシマ 甘古
(春・其三巻頭)
長閑さや目のふたになるいつくしま 嵐夕
(春・其三)

いつくしま遙拝
大幣の風のみことや浪の花 長サキ 蘇十
(春・其四・連句)
海に燈のあまる祭やいつくしま 巖島 十六

(夏・其三卷頭)
涼しさの置どころ也巖島 ^{サヌキ} 桃里

(夏・其三)
汐みちるいつくしま山夏の月 ^{西ガ} 其業

(夏・其四・連句)

などである。「巖島奉納集」の企画を喧伝するのを目的の一つとする初編の内容としては、淡泊に過ぎるのではあるまいか。

二 『巖島奉納集二編』

(1) 集の概要

『巖島奉納集二編』は、現状では未翻刻の書である。集は、春・夏・秋・冬の四季の部に分かれ、それぞれの季の秀吟を収める体裁を採る。各部の冒頭には、標題に次いで、「篤老園選」として、さらに「門人^{路宅}甘古^著」と署する。門人の路宅と甘古の協力を得て、篤老が選集した集である。

(構成)

各部の構成は次のごとくである。

春之部		夏之部		秋之部		冬之部	
発句	185	発句	169	発句	125	発句	133
歌仙	二	歌仙	二	歌仙	二	歌仙	三

発句の合計は612句、連句は九巻である。初編と比較すると、発句が優先的に収載され、連句は歌仙に限られている。さらに、発句と連句とについて、其一・其二のごとく細分せず、単純化した構成になっている。一見したところでの編者の創意・工夫は感取されない。反面、類型的であるだけに、読者にとっては親しみ易いものになっている。

(編纂の動機・目的)

編纂の動機・目的について、少しく言及するのは序文である。『巖島奉納集二編』の序文は、篤老自らが記している。次に全文を引用する。

おもふに七とせ八とせの昔、門人路宅・稲焉の輩、風雅の大願をおこし、天下の発句一万句をあつめて、それが中なる一千句をえらび、額上にしるし、巖島明神の廣前にかゝげ、なほ其ほ

かの佳句をもひらひ、桜木にのぼし、おなじ社の御文庫におさめ奉んといのりけるハ、いにし文化九年にあらハしたる、此集の初編なる稲焉がはし書にしるせるを見てしるべし。

さらに、その、ち稲焉不幸にして若死し、いはゆる片腕をもがれたるうへ、路宅も篤老も俗務いそがはしく、二編・三編の沙汰おこたりつるに、かくておくべき事にもあらねバ、ちかごろ門人甘古を加へ、ふた、び琢磨の勞をつくし、やうやく二編なりぬ。あふぎねがはくバ、四方の好士、路宅・甘古らが志をあはれみて、四海の發句ハ、明神の御前の潮の如くよせ、弥山の木の葉のちるが如くあつまれかしといふことを、このしふのはじめにかけよと、路宅・甘古が所望するにまかせて序す。

文政元年戊寅十月 篤老

注1. 句読点・中点は私に施した。

2. 濁音に限り、特に濁点を付した。

篤老の序文は三文より成る。第一文では、初編の稲焉の序文に記される、奉納の動機・目的の要約を述べる。ただし、自己の病氣快癒祈願の満願を記念しての法楽のための企画であることには触れていない。おそらくは、文化9年正月の初編刊行と同時に巖島神社の名山蔵に奉納されたことであろうが、肝心要の足疾についてはいまだ完治した訳ではなかった。刊行のその年・文化九年の冬には再発して歩行困難に陥り、篤老はこれを治療するために、翌文化10年の2月下旬より石見国の温泉津(ゆのつ)温泉に湯治に赴いている。この折の紀行・日記が『温泉津日記』である。

第二文では、稲焉の夭逝と篤老・路宅の俗務の多忙のため、二編・三編の編纂事業が停滞したが、ここに門人甘古の協力を得て、ようやくに『巖島奉納集二編』が刊行される運びに到ったとする。稲焉の死去は、前掲のごとく、文化11年5月18日であった。

第三文では、路宅・甘古をはじめとする篤老門下の風雅の志を憐愍して、広く同好の士の発句の寄稿を求めている。序文は路宅・甘古の要請によって製された。時に文政元年(1818)10月のことである。

篤老の序文は文政元年10月に製され、『巖島奉納集二編』は、巻末の刊記によれば同じく、「文政元年戊寅十月」に刊行されている。篤老の序文は、全般的に創意工夫の少ない、平凡な内容・文章である。おそらくは、自己の病気快癒祈願の満願を巖島明神に謝するために、法楽を目的とした奉納であるという大義名分が、足疾再発という不慮の事態により、首尾を一貫させることが困難になったことに起因しよう。序文中に「巖島奉納集」の動機・目的を、所期の方針で詳説することが難しい状況にあった。次いで、序文の文脈から判断して、名目の上からは篤老の選進であるが、作品収集・編纂・刊行の労の大半は路宅と甘古の尽力によったことにもよろう。作品集に籠められた思いは、初編の稲焉に比べると、よほど軽かった。

なお、二編の巻末には、「巖島奉納集」の第三編と第四編とが、それぞれ近刻、嗣出として予告されている。二編は、「廣島篤老園藏版」であり、梓行は「京烏丸下立賣上ル」の「勝田善助」である。

(撰者・作者)

『巖島奉納集二編』は、文政元年10月、門人の路宅と甘古の全面的な協力を得て、篤老が選進した集である。志の半ばで死去した稲焉に代わり、集の編纂を助けた平田氏甘古については、篤老の有力門人の一人で、晩年、京橋の東岸に水楼・月香園を構えて別号とした。

入集した句の作者に関しては、まずは編纂に従事した三者において、

篤老(11・八)、路宅(4・二)、甘古(13・二)である。初編とは様相を異にして、路宅については控え目ながら、撰者の句を多数入集させているのが特徴である。篤老については、発句の11句もさることながら、歌仙九巻の内の八巻にまで出詠している。篤老園の盟主としての存在感を誇示している。

大鳴社の社友の入集状況は、

篤老(11・八)、夏雲(5・二)、槐兎(5・×)、月章(10・一)、春平(4・×)、素白(1・×)である。特定の個人によって差異が見られるが、全般的には優遇されている。

路宅の兩組の構成員10員の中では、路宅(4・二)、篤老(11・八)、雨砌(2・×)、宇柏(2・一)

である。路宅と篤老を除いた構成員の入集は、初編同様に、微々たるものである。

篤老園の影響関係を具体的に指摘することはできないが、広島連衆で5句以上が入集する俳人は次のごとくである(但、既出の俳人を除く)。

一有(7・×)、薰令(5・一)、圭雨(6・×)、梧来(4・一)、壽旦(7・一)、春厓(9・一)、春魚(9・一)、舜路(5・一)、藤彦(6・一)、得一(7・×)、梅仏(9・×)、文衣(11・一)、方乎(10・一)

これらの俳人が篤老園の有力構成員であり、今次の企画を推進したのであろう。発句の句数に限定すれば、嵐夕の14句が入集中の最多である。梅仏については、染物業を営んだ湊屋与右衛門と目されるが、風律に師事したことで知られ、刊行前年の文化14年(1817)10月に死去している。多数の入集は、追善の意味合いが存したか。前掲の鳳山はその息男である。文衣については女流俳人である。

広島を除く芸備俳壇の中で、5句以上が入集するのは、

維鵬(倉橋、5・×)、可小(備後、5・×)、蔵六(尾道、6・×)、岱雨(福山、4・一)、南亭(吉田、6・×)、也籟(倉橋、5・×)

である。発句では6句、歌仙では一卷を上限とする。広島近郊よりも、遠隔の地や島嶼部の俳人が優遇されていることが判明する。倉橋連からは、維鵬と也籟の二者が5句入集しており、特筆される。

諸国の俳人で、5句以上の入集は、

烏翠(伊勢、8・×)、桂眉(京、4・二)、雪香(周防、5・×)、蒼虬(京、12・四)、杜蓼(京、7・×)、道彦(江戸、5・×)、武陵(丹波、10・×)

である。成田蒼虬を代表として、特別に多数の句が収められる俳人が含まれるのが特徴である。蒼虬は、言うまでもなく、芭蕉堂二世として闍更を後継した人であり、篤老にとっては同門の兄弟子

に相当する。入集作品では、発句12句についても、巖島神社の神事を詠出した句が存し、注目すべきである(後述)。が、ここでは特に歌仙四巻に出座することに注目したい。四巻の座衆は

- イ、篤老・蒼虬・路宅・桂眉・宇柏・方乎
(春部(1))
ロ、蒼虬・土方
(夏部(2))
ハ、蒼虬・夏雲・篤老
(秋部(1))
ニ、蒼虬・甘古・篤老
(冬部(2))

である。蒼虬は、おそらくは篤老以下の招請に応じて来広し、親しく直接に作句指導を行なったものである。四巻は、春・夏・秋・冬の各一卷であり、四季に及んでいる。蒼虬は、三座において発句、一座において脇句を詠出する。篤老自身も三座において同席する。集中に収載される歌仙九巻の中で、篤老の同座を欠くのは一卷のみであるが、それが口の蒼虬と土方による両吟歌仙である。土方は篤老の門人で、後に六呂堂を開創する。かくして、蒼虬の来広の年時は未詳であるが、篤老一門は挙って歓迎し、俳諧熱は大いに高まったのではあるまいか。あるいは、『巖島奉納集二編』の編纂の一つの契機をなしたとも想像する。

他流派の俳人を排除していないことは、初編と同様であり、

- 玄蛙(3・×)、筵史(2・×)、鳳山(1・×)、
古江(1・×)、和切(1・×)、江左(1・×)
のごとくである。少数句ながら入集する。
(巖島の句)

巖島連の入集としては、

- 巖平(1・×)、十六(4・×)

が認められる。十六は初編にも入集した。

巖島、巖島神社を詠出する句を掲げる。

いつくしま

- 8 龍燈にうこくや明の七五三筋 ^{*} 文衣

いつくしま

- 149 板橋や内侍の通ふ夕さくら 方乎

- 183 宮嶋や汐のうちこむ春の水 甘古

海上おたやかなる事杯中のことしなと、

戯つ、舌崎のあたりを見るに

- 184 柏手のひ、きにゆるかはるの海 鳳郎

(以上4句、春)

巖島祭

- 114 百八の廻廊つゝく扇かな ^{石見} 吾風
(夏)

大元社にて

- 46 ことごとく神のものなりちる木の葉 方乎
いつくしま節分
127 そここゝに通夜の軒の寒哉 空阿
(以上2句、冬)

集中第一の大作であり、編纂者が巖島奉納の眼目の作品として収載したのは、長文の序文を付した次句である。

七月十四日の夜ハ、巖島の延年とて、社僧の翁などありけるが、いと古風にして、そのさまおぼろげに見えわかぬも、中へに尊し。社頭に七福神の御像一鉢かざり奉る。今年ハ三郎殿の御番にあたらせ給ふとて、浦人のきほひもことさらニぞミえける。賓客社の神事半とおぼゆるころ、本社東西にかざりたる御像の綱をきりおとすやいなや、そのみぐしをとらむと、捌髪赤裸ニてもミ合おし合、はてハ満來る汐に飛入へ争ふありさま、いつはつべき業ともミえざりける。かくあらそひへて、家に取もどるものハ、さらに其方角の町々、來年中の幸を得るとて、我一いのちがけのはたらき也。東ハ塔の岡、西ハすぢかひ橋を境とさだめ、それまでとりえてかへるものを奪ひ返す事ハ制禁なりとかや。今宵ハとりわけ汐高、廻廊の御階も浮ばかりなるに、御首流れ失たりといふ聲きこえて、人へしばらく猶豫しけるひまに、波の底をや潜りけむ、東町の何がし、みぐしをとりおさめたりと注進するに、檢使・社僧のともがらはらへと立あがれば、数万の人も何地へか行けむ、あとハ御燈の光のミ、虫の音こゝかしこにきこゆ。 蒼虬

- 38 むしの音も神秘に似たり波の上 (秋)

注1. 句読点・中点は私に施した。

2. 濁音に限り、特に濁点を付した。

篤老が兄とも仰ぎ、篤老園門下が一方の師とも仰ぐ、芭蕉堂二世の蒼虬の作品である。巖島神社の代表的な行事の一つであった「延年祭」当夜の実態を写したものである。7月14日(旧暦)の夜、

供僧と伶人によって執り行なわれた。京都仁和寺より移された祭りで、延年坊主や延年の舞が内容であるところから、「延年祭」と名付けられたという。序文の大部分は、さらに祭りの最高潮であり、終尾を飾る、裸体の男子による勇壮な現行「玉取祭」の実態を活写している。現在では、旧暦7月18日に、直径五寸の楠の宝珠を争奪する行事に変化している。が、当時においては七福神の“みぐし”（首の尊敬語）の争奪で、当年は“三郎殿”・夷三郎の恵比須の順番であったことが知られる。蒼虬の作品は、巖島神社の神事を全国に紹介、喧伝するもので、奉納集の内容に相応しい。蒼虬の来広により直接の指導を得、来島の結果として上記の作品を得たことは、『巖島奉納集二編』編纂に拍車をかける契機になったのではないかと想像する。

(2) 倉橋連の動向

（『巖島奉納集二編』における優遇—文政元年）

『巖島奉納集二編』への倉橋連の入集は、
 維鵬（5・×）、魚目（1・×）、圭甫（2・×）、
 也籟（5・×）

である。その句を入集の順に示すと、

- | | | |
|-----|----------------|-------------------|
| 16 | はつ東風に厩のいきり句鳧 | ^{倉ハシ} 也籟 |
| 25 | 罪なしといひへ折や梅の花 | 也籟 |
| 84 | 築山の手入も済て社日哉 | ^{倉橋} 維鵬 |
| | （以上3句、春） | |
| 2 | うまれ子の二三日して衣かへ | 也籟 |
| 138 | 元山をひとつもちたる暑哉 | 維鵬 |
| | （以上2句、夏） | |
| 90 | とし寄のこま氣付たり答たはこ | 維鵬 |
| | | （秋） |
| 17 | 定りて竹ニハ竹のしくれかな | 也籟 |
| 21 | 村長か人よひありくしくれかな | 維鵬 |
| 32 | 牛買てうつ手や里の一しくれ | ^{倉橋} 魚目 |
| 93 | わかまゝに子を這せけり冬籠 | ^{倉橋} 圭甫 |
| 95 | 飼霍を一日はなす冬至哉 | 也籟 |
| 111 | 冬の夜に朧もあるか水仙花 | 維鵬 |
| 118 | 鞍や神さひ祢宜か行通ひ | 圭甫 |
| | （以上7句、冬） | |

となる。維鵬と也籟の5句は、広島以外の連衆と

しては、破格の厚遇であることはすでに指摘した。就中、也籟の句については夏部の2句で代表されるように、各部の比較的早い位置に配されている。四季の中では、冬部に多くの句が入集するのも特徴である。

倉橋の連衆は、入集した俳人の総数としては4員であるが、篤老門において厚遇されている。『巖島奉納集初編』においては、入集した俳人は認められなかった。文化9年(1812)から文政元年(1818)までの間に、急速に篤老(門)に接近し、その信任を得るに至っていることが判明する。その際に中心的な役割りを果たすのが、林也籟であったらしいことも想像される。

（『さゝれいし』における動向—文政二年）

『さゝれいし』は、文政2年(1819)12月に、やがて多賀庵四世を継ぐ筵史が編纂・刊行した作品集であった。集中における倉橋の連衆(含、鹿老渡)の入集状況(20員20句)については、すでに「はじめに」項において掲げ、その意味するところについても言及した。前年度刊行の『巖島奉納集二編』への入集状況と比較する時、各自1句ながら、20員もの俳人の句が採られる点が特筆される。倉橋島における当年の多賀庵門下の総勢が入集している観がある。20員の中には、『巖島奉納集二編』に入集する4員も含まれる。この二集間における入集状況の差異をいかに解すればよいのであろうか。

『さゝれいし』の刊行は、翌年の刊行であるという点からも推されるように、『巖島奉納集二編』の編纂・刊行を意識したものであったろう。集に収められる作品は、歌仙四巻、一折一卷、発句383句である。その中で巖島連の入集は、

花友(1・×)、岳居(1・×)、巖平(1・一)、
 志得(1・一)、粧山(3・一)、杜涼(1・×)、
 徳言(1・×)、南溪(1・×)、南嶂(2・一)
 である。9員の俳人が入集する。特に注目されるのは、収載された歌仙四巻の中の一巻が、巖平・筵史・粧山・南嶂・志得の興行である点である。巖島連が有力な多賀庵門下であったことを示唆していよう。「巖島奉納集」の初編・二編の両集に

入集した十六の句は、『さゝれいし』には認められず、9員の中には、二編に1句入集する巖平が含まれるに過ぎない。十六については篤老門の影響が強く、一方、多賀庵門下の巖島連の中心に位置したのは、前掲の歌仙一卷に発句をも詠出した巖平であろう。

巖島・巖島の句としては、

いつくしまに渡りける日、仁保の島を過るとて、船中の一折

日短き島のけしきや鴨の聲 筵史
(連句・一折)

いつくしまにありて

1 雪を見に出るや二朝花の春 路宅

いつくしまにて

33 宵闇や鳥井のうちを鳴千鳥 李洞

34 初申や笛の音さゆる浪の音

初申ハ此島の太初の祭事にして、舞楽あり。その後、明灯をしめし、くらかりの神秘あり

35 御しめしや神に居並ふ夜の心 筵史

である。連句の一折は巖島への渡海の途次の船中における、筵史と李洞の両吟であった。この連句一折と33~35句の発句が同じ機会の作品であるとすると、同集内における眼目となる作品(群)として処遇されたと解される。2月初申の日には、舞楽が演じられ、明灯を消しての秘事が存した。神社の神事を句にしており、奉納集としても相応しい内容になっている。

多賀庵直系の筵史としては、篤老門下の『巖島奉納集二編』の編纂・梓行を眼前にして、無意識の裡にもこれに対抗する気持が働いたとしても自然であろう。両派は決して他を排斥するといった関係ではなかったが、筵史には多賀庵の次代を担う責務があり、自負心も存した。多賀庵門下の総力を挙げて、篤老門下の『巖島奉納集二編』に勝るとも劣らない集に仕上げたいという意欲が存したのではあるまいか。巖島連を重用し、さらに自ら積極的に巖島・巖島神社の句を製し、入集した点にその一端を見るのである。

『さゝれいし』には筵史が各地の多賀庵門下を広く動員している。当年・文政2年の倉橋島にお

いては、20員ほどに影響が及んでいたことになる。が、一方では前年の『巖島奉納集二編』に見られるように、新しい流れである篤老門への傾倒もすでに始まっており、也籟や維鵬を中心にして、急速に親密さを増していた。

なお、筵史の『さゝれいし』への入集は、連句の五巻、発句の8句である。特筆されるのは、集に収載される連句諸巻のすべてに自ら出座し、指導していることである。参考までに、篤老の同集への入集は、発句1句である。

(『温泉津日記』における動向—文政三年)

『温泉津日記』2巻2冊は、「文政三年庚辰五月」に刊行されるが、これに到るまでの経緯は少しく複雑である。集の内容は、次のように大きく三つの部分に分かれる。

- 1 篤老の温泉津温泉への湯治行
- 2 瀬野川における蛍狩り関連句
- 3 稲焉の七回忌追善

この中の1が上巻に収められ、冊の題簽に「温泉津之巻」と副題される。2と3が下巻に収められ、冊の題簽には「蛍之巻」と副題される。1・2の両巻を篤老の机上より「ぬすミ」出し、自らの集句を添え、「杖をかうふらん」時には一身に罪科を負うことを覚悟で、師に無断で刊行することを企画し、如上の経緯を跋文に認めたのは稲焉であった。が、刊行のための準備万端を整えながら、稲焉は夭逝する。次いで、このせっかくの企画の頓座を惜しんだ篤老門では、篤老以下、稲焉の七回忌を機縁として、新たに3を添えて刊行する。改めて刊行の経緯を説くのは、3の巻頭に置かれる生熊月章の序文である。

師の杖かうぶらんと書し稲焉は、あきの國安藝の郡中の村の里長清左衛門が子、姓ハ野間、名は寶、通称藤右衛門とて、家富一門榮え、とし久しく人にしられたる家がらなり。生質風雅をこのミ、古く篤老園のをしへの子となり、ひろく四方に文かよハせ、おのが産業をつとむるのほか、さらに他事なくもてあそびける。されば、かゝるわざの張本となりてわが輩にもはかり、二巻の草稿全くとゝのひ、すでに梓にのほさん

とするに及び、風勞といふやまふにおかされ、ながく黄泉の客となりけるは、をしゝともかなしとも、いはんかたやハある。そのゝちハ誰罪人と名のり出るものもなく、むなしく机上の煤にまぶれけるが、ことし文政三年五月十八日ハかれが七回忌なれば、ふたゝび涙をさそふ種にもと、しかへこの事どもはじめて師にかたりけるに、師いたく悲しミ、捨おくべきわざならずとて、末にちかごろきこえし發句をも附録し、うつべき杖はかの石見の國の青海ばらへなげずて、経巻書写の功德にもまさりなんと、師みづから板下をしたゝめ、つひにかれがねがひを達する事にハなりける。死して後さへかくばかり師に申ハるゝこと、子弟の身にてハうへもなくかたじけなき事なるべけれど、ながらへて杖かうぶらんにはいかばかりかまさりてかなしからずや。さて今ハ十余年のむかし、師あしなへ、ふむことあたはざりしに、治療のことなどともにかれこれといひあへりしが、年を経月をかさねて、温泉津の功験いちしるく、今ハ江戸へも唐へも行べきほどに愈たりしを、第一にこゝろやりせしをのこハ、かきおける水莖の跡、よみのこせるくさへこの数のミにて、すでに七とせの世がたりとなりけるこそ、なげきてもへあまりありけれ。されば此しふを見ん人、百万遍の念佛申たまはんよりハ、螢のほくの一句だにも手向たまハゞ、それにまさる追福あるべからずと、又一言を加るものハ、弟子兄弟の月章なり。

注1. 句読点は私に施した。

2. 濁音に限り、特に濁点を付した。

野間稻焉は、安芸郡中野村の庄屋で、名は宝、通称は藤右衛門である。文政3年5月18日が稻焉の七回忌に相当するところから、篤老に談合したところ、「末にちかごろきこえし發句をも附録し」て、篤老自らが板下を認め、刊行の運びとなっている。

温泉津温泉への湯治行については、篤老「温泉津日記」の冒頭部によれば、文化9年の冬に足疾が再発したため、藩主より50日間の暇を賜わり、翌文化10年2月22日に立出している。篤老の足疾は「この六とせはかりさき」に患ったとあるので、

文化4、5年頃よりの持病であった。文化9年が、『巖島奉納集初編』刊行の翌年であることは前述した。一時期快方に向かい、祈願満願による奉納であったが、その喜びが実は束の間であったことが知られる。続編以下において、少しく奉納の動機と目的を変更せざるを得なくなった事態である。

『温泉津日記』は、巻末の刊記によると、「篤老書、門人等校」「篤老園藏板」で、広島中島本町の世並屋伊兵衛こと牛棟、同新町京橋町の和泉屋新蔵こと甘古、同新町堀川町の隅田屋平蔵こと春魚の発行である。

この篤老門の師と弟子とが協力して刊行した『温泉津日記』の3「末にちかごろきこえし發句をも附録し」た部分に、倉橋の連衆が入集する。以下、これを引用する。

- | | | | |
|-----|----------------|-----|----|
| 29 | わか葉山鴉をつかふ神の有 | 倉橋 | 也籟 |
| 30 | 跟から暑のゝほる真昼哉 | | 佳又 |
| 31 | しれぬ字を向う行なりけしの花 | | 東黎 |
| 32 | 芥子散や一日京のなつかしき | 僧 | 圭甫 |
| 78 | 朝霧に神の顔出す鳥居かな | 倉橋 | 維鵬 |
| 79 | 菊咲や溪はちんへ水のおと | | 拾貝 |
| 80 | 土器の無事に流れて秋の水 | | 篤民 |
| 113 | やま伏の便船待やふゆの雨 | 鹿老渡 | 全輅 |
| 114 | 月の出て鴨のこえけり淀の城 | | 梅雨 |
| 115 | 戸を明てミるや木のはの降月夜 | | 雨夕 |
| 116 | いはれある二子の僧や寒念仏 | 倉橋 | 赤雄 |
| 117 | 旅人はミな酒臭き枯野かな | | 巨江 |
| 153 | 若草や此まゝ世をハわすれたし | 倉橋 | 魚目 |
| 157 | 梅か香や手のあたゝまる筒茶碗 | 鹿老渡 | 亀甫 |

内輪の仲間同士の近況報告のような気軽さも存したのであろうか、各俳人の入集はいずれも1句である(因みに「老園」の篤老も146の1句)。倉橋の連衆のばあい、倉橋連10員と鹿老渡連四員である。

各集への入集の状況が集を編纂したそれぞれの門流・流派との親疎の度合いを反映していると断定するのは早計に過ぎるかもしれないが、一つの指標にはなり得ると考える。上記の附録部における倉橋の連衆の入集の状況のばあい、一島から少くとも14員の俳人が選ばれているというのは、『さゝれいし』の20員には及ばないが、破格の厚遇である。同島の俳諧を愛好する層が厚く、行脚

途次や、一時的に来島の宗匠の指導ながら、高い水準に到達していることを知るのである。

注目すべきは、文政元年から3年にかけて編纂された各集における入集状況が、『巖島奉納集二編』の4員13句→『さゝれいし』の20員各1句→『温泉津日記』14員各1句であった点である。いずれも各集において厚遇されながら、少数精鋭の重点的厚遇→大集団への均一的厚遇→準大集団への均一的厚遇として見受けられる。『さゝれいし』への入集状況で見ると、多賀庵門下への親近の度合いは依然として高い。が、一方で篤老門への親近の速度は急である。わずか二年の間における4員→14員への増加は、既成の俳諧や俳壇に対する素地が存しただけに、一つの変動を意味・象徴していると考えて良いのではあるまいか。繰り返すが、多賀庵と篤老園との両門下は相互不通の間柄ではない。が、倉橋の連衆においては、多賀庵の影響に翳りが見え始め、篤老門との親密な関係が深化し、表面化する時期を迎えたことを示す。

倉橋の連衆の中心に位置したのは、三集のいずれにも入集する維鵬、魚目、圭甫、也籟であったかに見える。同時に、四者はいずれも篤老門に親近、傾倒した急先鋒であったことを意味する。雅俊を基準にした瀬越家では、文政3年3月に死去する父・雅休の斗山は旧世代に属し、多賀庵の影響・吸引力が強く、新しい篤老門の俳諧には少しく消極的であったようである。これに対して当人・雅俊の篤民は、斗山の影響を受けて多賀庵の俳諧に親しみ、俳壇に登場するが、新しい篤老園の俳風に順応し、急速に親近する。この一種の世代交代は、他の倉橋の連衆についても、類例が指摘し得るのではなからうか。

三 『巖島奉納集三編』

(1) 集の概要

『巖島奉納集三編』も、現状では未翻刻の書である。集は、春・夏・秋・冬の四季の部に分かれ、それぞれの季の秀吟を取める体裁を採る。各部の

冒頭には、標題に次いで、「篤老園選」として、さらに「門人^{啓宅}甘古著」と署する。門人の路宅と甘古が前回・二編同様に全面的に協力し、篤老が選集した集である。（『巖島奉納集三編』では篤の字と薦の字とを通用している。本稿では「篤」字に統一して表記する。）

(構成)

各部の構成は次のごとくである。

春之部					夏之部				
正月	二月	三月	計	歌仙	四月	五月	六月	計	歌仙
152	94	75	321	三	168	102	117	387	二
秋之部					冬之部				
七月	八月	九月	計	歌仙	十月	十一月	十二月	計	歌仙
93	126	76	295	二	185	43	25	253	三

このほか、末尾に雑の句が2句追加される。

発句の合計は1,258句、連句は歌仙一〇巻である。発句だけの比較では、初編の約4.4倍、二編の約2倍に相当する。作品量については、その規模は着実に拡大していることが言える。発句は、各季の中をさらに各月に細分し、各月個有の素材に適した句を順次配列している。四季の変化・進行に即して展開する方法は、和歌における勅撰集の四季の部の配列法と類似する。

(編纂の動機・目的)

集中において編纂の動機・目的に言及するのは序文であるということで、初編・二編の序文を引用、紹介した。『巖島奉納集三編』の序文を製したのは、倉橋連の林也籟である。次に全文を引用する。

三吉野ハ花、むさし野ハ月。吾安藝の国巖嶋ハ、その月にも花にも、雪ほとゝぎすにも、又なき仙境にして、蓬萊とも名づけ、四面うみの中に浮び出、松杉数千年のみどり蒼へとさかへ、ことに櫻多く、花の頃ハ海も山もひとつに埋れて、一團のしら雲などいふばかりに、月ハ良夜の清光漣に映じ、仙娥も舞、鮫人も躍り、雪・しぐれ・紅葉・ほとゝぎす、故人の咏喟おひ茂る木艸よりも多く、しかと猿とハ大明神のみつかはしめと申習せ、常に市中に遊びたハむる、

こと異里の犬猫よりもしたし。されど短き春の夜の草枕にハ断腸の夢を破り、明がたき秋の夜ハわりなき閨の怨をそふ。其社傳・風土の委しきハかの地の記を讀て見るべく、前件かく述るものハ吾はいかい一派の澹泊にして、いまだ此地に遊ざる諸風子の腸に満しむる糧とハするなりけり。さるハいにし年、飯田老園宗匠の門人某等、さきに同社奉納集を發願し、初編・二編已に調ひ、ついで三編のさたにおよび、おのれはし書せよと仰をかうぶり、もとより其任に當るにハさらざめれど、いなむべきにもあらねば、彼鹿猿の毫の末を拾ひてかきつけぬ。ねがハくハ四方の雅客、月となく花となく、雪・蜀魂、四時のほ句ハいやましに奉納して、永く皇神の御惠の着きをあふぎ、はた己等が同志のいさをしをつぐをあはれみ賜ひて、十万句奉納全備の満願を速ならしめ玉へと敬ひいふ。

文政酉春正月 ^{門人} 也籟拜

注1. 句読点・中点は私に施した。

2. 濁音に限り、特に濁点を付した。

也籟の序文は、美文調で書かれ、内容的には前・後二つの部分に分かれる。前半部では、いまだ巖島の地に遊んだことのない風流子に対して、その見るべき所・風雅の特徴として特に強調するべき要点を説く。後半部では、「巖島奉納集」三編を編纂するに及び、いまだ弱輩の也籟が序文の製作を命ぜられたについては、辞むべきではないのでその任に当たるが、願わくば四方の雅客・俳人は四季の発句を寄せてこれを奉納し、篤老門下の念願である巖島明神への十萬句奉納の満願を達成するべく、協力を仰いでいる。

後半部における記述で、注目すべき二・三の点を取り上げる。一つには、初・二編が「飯田老園宗匠の門人某等」の「發願」によるとしている点である。文学史・俳諧史の上では、「巖島奉納集」は飯田篤老の編著として理解されているが、それはむしろ名目上のことで、篤老門下が、当初は師のため、さらには一門・俳壇の隆盛のために、全面的に協力して成立したものである。そこでは、飯田篤老その人が自己の俳風の確立や流布を目的とするといった意識は希薄であり、いずれの編も

門人、しかも富裕の門人が中心になって、表現は不適切であるが自らの経済力に任せて、自らの文名をも高めるために、協力・尽力した気味が感取される。二つには、也籟の序文製作に関しては、「おのれはし書せよと仰をかうぶり」とある。命を下した人としては師・園主の飯田篤老のほかには考えられないが、篤老はなぜに城下広島、あるいはその近郊の有力門人ではなく、瀬戸内島嶼部倉橋島の也籟に、集の顔とも言うべき序文の製作を依頼したのであろうか。也籟の文才・俳才が序文を製するに足ると認められていたことが前提であったろう。次いでは、やはりその富裕・経済力に依存するところが大きであったのではあるまいか。篤老をはじめとして篤老園に対する経済的な援助、具体的には『巖島奉納集三編』の刊行に必要な資金の捻出に、也籟個人、あるいは倉橋連が全面的に協力したのではあるまいか。篤老門下での役割り、俳歴ならびに文才、さらには企画の継続性を勘案した場合には、序文製作の第一の候補には路宅、第二の候補には甘古が上げられて当然であると考ええる。両人を抑えて也籟がこの名誉に浴したについては、かなり特別な事情が存したと考えるのである。なお、也籟の為人については後述する。注目すべき三つは、「十萬句奉納」の目的には触れるが、篤老の足疾の経過については一言も触れていない点である。

也籟の序文は文政8年(1825)正月に製され、『巖島奉納集三編』は、卷末の刊記によれば同じく、「文政八季乙酉正月」に刊行されている。また、同所では「巖島奉納集」の第四編と第五編とが、それぞれ近刻、嗣出として予告されている。三編も二編と同じく、「廣島篤老園藏版」である。(撰者・作者)

『巖島奉納集三編』は、文政8年正月、二編と同様に門人路宅と甘古の全面的な協力を得て、篤老が選進した集である。

入集した句の作者に関しては、まずは編纂に従事した三者においては、

篤老(2・八)、路宅(5・二)、甘古(17・一)である。二編と同様に路宅については控え目ながら、撰者に相応しい入集である。篤老については、

発句の2句は少数に過ぎる感もあるが、一門の統帥としての面目は、収載する歌仙一〇巻の中の八巻にまで出座し、指導していることである。一巻については、篤老の別号「老園」として出句している。

大鳴社の社友の入集状況は、
篤老(2・八)、夏雲(17・一)、月章(22・二)、
素白(2・×)、鳳郎(19・一)

このほかの同人の入集は認め難い。特定の個人によって差異が見られ、二編における入集の様相とも異なる。鳳郎は、社の活性化を図るために、文政4年のころ、新加入した同人である。『巖島奉納集三編』の編纂に対し、大鳴社としての関与の程度は判断し難い。

路宅の雨組の構成員10員の中では、
路宅(5・二)、篤老(2・八)、雨砌(2・×)、
宇柏(×・一)、松宇(1・一)

である。路宅と篤老を除いた構成員の入集は、初編と二編と同様に、微々たるものである。主催者である路宅、構成員としての篤老と、編纂者の中の二人までが含まれながら、「巖島奉納集」への雨組の関与は稀薄に過ぎる観がある。そもそも路宅に関しては、篤老の有力門人の筆頭として遇され、「巖島奉納集」の企画を全面的に支援し、遂行した功労者として考えられてきた。が、路宅の「巖島奉納集」への入集は少数であり、主催した雨組の構成員に対して積極的に投句を働きかけた痕跡を見出し難い。路宅が篤老の片腕として存在し、編纂上の種々の助言を惜しまなかったことを疑うものではないが、実質的に業務遂行したのは、むしろ稲蔭や甘古ではなかったかと想像される。

篤老園に占める地位や役割を具体的に指摘することはできないが、広島連衆で10句以上が入集する俳人を掲げる(但し、既出の俳人は除く)。

一冬(17・×)、こと(10・×)、志つ(15・×)、
春厓(10・×)、春魚(11・×)、春川(13・一)、
竹塙(10・×)、梅笑(15・×)、木居(15・×)、
鷹鳶(13・×)、蘆洲(10・×)、露宿(11・×)
発句の限りで言えば、20句を越える俳人は見当たらず、一冬の17句は甘古と同数である。大鳴社の月章や鳳郎に次いで、夏雲とは同数である。こ

と・志つ・露宿は、いずれも「女」の注記を有する、女流俳人である。俳諧文芸に対する女性の進出を反映すると同時に、集に彩りを添えるための配慮でもあろう。鷹鳶は、俗名は飯田利義、篤老の息男である。

広島を除く芸備俳壇の中で、10句以上が入集するのは、

維鵬(倉橋、36・二)、可小(備後、10・×)、
佳又(倉橋、14・二)、巨江(倉橋、18・二)、
魚目(倉橋、18・二)、圭二(仁方、11・×)、
圭甫(倉橋僧、38・二)、茶隠(三原、29・×)、
芝鳳(三原、14・一)、拾貝(倉橋、8・二)、
如杉(呉、11・×)、素濤(呉、15・×)、桃園
(狩留家、16・×)、篤民(倉橋、21・二)、南
亭(吉田、21・×)、二流(吉田、15・×)、鳧
眠(三原、11・×)、也籟(倉橋、24・二)、菊
舎(三次、16・×)、芦角(南方、10・一)

であり、20員の多きにのほる。最多の入集は倉橋連の圭甫の38句であり、次いで同じく倉橋連の維鵬の36句であるが、両者の句数は他の入集者の中で群を抜いている。いずれにしても、三編におけるこの20員、38句という数字については、二編における6員、6句とは比較にならない。

『巖島奉納集三編』の一つの特徴は、広島を除いた芸備俳壇に対する優遇があげられる。各地俳壇(一連)の所在に注目すると、何と云っても倉橋連の8員が特筆される。三原の3員、呉・吉田の2員がこれに次ぐ。瀬戸内沿岸部の狩留家・呉・仁方・南方(豊田郡南方村)・三原の各地は、広島より東に海岸線に沿っており、篤老園の勢力の伝播・拡張が反映されていると考えることができよう。勢力が及ぶ地方の中小俳壇同士が一線上に確保できることは、城下・広島を拠点とする篤老園にとって最小限の労で影響力を及ぼすことができ、理想的な展開であった。三次・吉田は山間部の拠点、倉橋は島嶼部の拠点ということになる。それぞれは、篤老自身が具体的にどのように関与したかは不明であるが、いずれにしても篤老門が自己の門風の伸展を図り、築き上げた拠点である。『巖島奉納集三編』が、初編・二編と比較して入集句の量が飛躍的に増加しているのは、これら自

己の築き上げた拠点の俳人入集を優先・優遇し、芸備の一大俳壇としての全容・組織としての存在感を明示しようとした意図も存したのではあるまいか。それぞれは経済的にも発展を遂げた地域であり、その中心に豊裕な俳人が存在した。これらを擁することは、篤老園という組織の運営、相次ぐ作品集の刊行にとって、欠くべからざる要件であった。なお、倉橋連の詳細な入集状況については後述する。

諸国の俳人で、10句以上の入集者は見当たらないが、「行脚」の宗匠の入集として、

五錐（行脚、18・×）

がある。二編で掲げた7員の中で入集したのは、烏翠（伊勢、3・×）、蒼虬（京、4・×）、武陵（丹波、1・×）

である。一門が師として仰ぎ、発句12句と連句四巻が入集した京洛の成田蒼虬も、発句の4句に止まる。『巖島奉納集三編』の編纂の動機・契機が、二編とは異なることを示す現象である。

他流派の俳人を排除することがないのは、初編・二編と同様であるが、前掲の俳人入集の状況は、

玄蛙（3・×）、筵史（×・一）、和切（2・×）

であり、微々たる数字である。篤老園が一大流派として確立し、無意識の裡にも閉鎖性を帯びつつあることを意味するか。俳風、結社の停滞の兆しを示す現象とも解される。

（巖島の句）

『巖島奉納集三編』には、巖島明神・巖島神社への奉納を謳いながら、巖島連（宮島連）の入集が認め難い。編纂者、あるいは篤老園としてはぜひともお膝元の連衆の発句の投句を期待したものであろうが、これを欠いている。流派の上から篤老門に直属しなかったということもあったろうが、読者は少しく不自然な感を抱いたことであろう。

巖島、巖島神社を詠出する句を掲げる。

いつくしま島廻せし時

83 鶯もいはふこゝろか聲高し 薫令

いつくしまにて

147 春雨を見にのほりけり塔の岡 春川

いつくしま

150 ゆふなきや社頭に春のたつふりと 柳屋
177 初花の海となりけり巖しま 也籟
(以上4句、春)

いつくしま

3 朝はれやふとき魚飛四月海 瓢齋
巖島本地堂
23 いたゝかす夏花の水や二日酔 魚目
巖島滝小路
202 若竹にしミける谷の磬の音 魚目
273 南瓜もわたる祭やいつくしま 篤老
274 夜にかゝる祭の汗や巖島 素白
285 宮しまへ向て開きし扇かな 保壽
387 華表から夏はうまれて巖島 五錐
(以上7句、夏)

いつくしま

127 寄来るや六十余州月の客 竹叟

いつくしま二句

142 大鳥居野分をことゝせぬ姿 春川
143 華表からもち出す雲や野分吹 佳又

巖島二句

203 月さすも潮さすも鹿の鳴所 ^{三津}玉鳴
204 鹿なくや身柱に落る木の雫 把翠
265 はまくりの雀もミたしいつくしま 茶隠
(以上6句、秋)

いつくしま一拝の時

177 水とりの仕事にぬらす鳥居かな 沼人
(冬)

一見しただけで巖島の詠作であることが判明する句である。神社の代表的な行事である「お島廻り」を素材とする句、撰者である篤老の句、夏の部の巻末を飾る五錐の句、さらには複数の倉橋連（也籟・魚目・佳又）の句などに注目される。倉橋連と言え、例えば春の部に入る

106 日のすちの外や餘寒の大鳥居 也籟
なども、巖島の詠作であろう。倉橋連の連衆は、いく度か実際に巖島への吟行を試みたようであり、集中にはこの折の句がかなり収載されているのではないかと想像する。

とは言え、入集する巖島の句については、初編・二編のそれと比較する時、内容的には巖島・

巖島神社との密着度が低く、話題性に乏しい。『巖島奉納集三編』の編纂の動機や契機を示唆するような句、集の眼目に遇されるに相応しい句が見当たらない。三編を奉納する意味・意義を集中に求め難い状態である。このことは、「巖島奉納集」の四編以下の未刊行の原因が、篤老の死去のためばかりではなく、奉納の動機や契機に直結するような巖島の句が求め難い状況に陥ったことにも有することを示唆しよう。

(2) 倉橋連の動向

(入集の状況—異常な優遇)

『巖島奉納集三編』において、倉橋の連衆がいかに優遇されていたかは、これまでの記述からも明らかであろう。芸備の他の俳壇のいずれよりも、篤老園の本拠である広島連の連衆よりも、それは優遇されている。入集の状況を、さらに詳細に示すと、次のごとくなる。

俳号	発句					連句 歌仙	注記
	春	夏	秋	冬	合計		
維鵬	7	18	5	6	36	二	倉橋
雨夕	2	2	2		6		鹿老渡
佳又	2	6	2	4	14	二	倉橋
亀甫		1			1		倉橋
巨江	2	11	2	3	18	二	倉橋
魚目	7	10		1	18	二	倉橋
圭甫	10	17	4	7	38	二	倉橋僧
拾貝	1	5		2	8	二	倉橋
全輅		4		4	8		倉橋僧
斗山						二	
東黎						二	
篤民	1	15	1	4	21	二	倉ハシ
也籟	9	11	1	3	24	二	倉橋
	41	100	17	34	192	二	

10句以上入集する連衆が続出している。序文を製した上で発句24句の也籟、発句38句で集中最多の圭甫、発句36句の維鵬が突出し、次いで篤民、巨江、魚目、佳又が続く。『巖島奉納集三編』の発句の総数1,258句であり、倉橋の連衆の192句は、実にその約15%にも相当する。瀬戸内島嶼部の中小俳壇の10名ばかりの連衆の入集句数としては、驚異的な数字と言えよう。

也籟・圭甫・維鵬・魚目は、『巖島奉納集二編』にも入集し、この中の也籟と維鵬は特別に優遇されていた。早くより篤老門に親近し、同門門人として遇されていたことが想像される。倉橋の連衆が篤老門下として活動・行動する折の中心的存在である。篤民・巨江・佳又などは、二編には入集していないが、『温泉津日記』の附録部には入集する(前出)。後れ馳せながら、急速に篤老門に近付いた人達であろう。雨夕については、特別に鹿老渡の連衆として遇されている。本浦を中心とする倉橋連とは少しく別に活動したものか。三編では倉橋連として遇される亀甫と全輅については、『温泉津日記』の附録部では鹿老渡連として遇される(前掲)。鹿老渡連については、処遇が流動的である。同一島内・同一村内とは言え、集落が異なれば一種の対抗意識や排除意識も働き、時には鹿老渡連として独立して活動し、時には倉橋連に吸収されて活動したものであろう。

倉橋の連衆に対する異常な厚遇の因由は奈辺に存するのだろうか。専門的な分析・指摘は不可能であるが、当時期の倉橋、とくに本浦の経済的な活況は著しいものがあつたようである。倉橋連を構成した連衆は、いずれも村の指導者層であり、富裕な百姓、商工業者、僧職・神官であつた。これらの人々が結束して、篤老園の企画を経済面・資金面より支え、集の刊行に漕ぎ着けたのではあるまいか。表現に適切を欠くことを危惧するが、作品の完成度・水準は二の次にしても、刊行の功に報いる必要があつたのではあるまいか。倉橋連の興行した連句二巻の入集が、そのことを如実に示しているように思われる。

『巖島奉納集三編』の連句はいずれも歌仙で、各部において、発句を掲載した後に、二～三巻が収められる。倉橋連の歌仙は、春の部の三巻の第一巻、秋の部の二巻の第二巻として配される。それぞれの歌仙の発句と、出座した連衆とは、次のごとくである。

春(1)… (発句)「むく起のミものとなるや露の
臺 篤民」

(連衆) 篤民・木海・魚目・斗山・佳
又・圭甫・拾貝・巨江・也籟・

維鵬・東黎

秋(2)…(発句)「藁屋根も茸かへころや木の實
降 維鵬」

(連衆) 維鵬・篤民・也籟・巨江・魚
目・拾貝・佳又・斗山・東黎・
圭甫

上記の歌仙連句二巻で注目されるのは、春(1)「むく起の」歌仙に出座する木海は例外として、いずれも倉橋連10員で興行されていることである。まずは、篤老をはじめとして、篤老の有力門人の同座が認められないことである。そもそも集中の歌仙一〇巻の中で、篤老の出座は実に八巻を数える。これは、倉橋連の二巻を除けば、全巻に出座していることを意味する。『巖島奉納集三編』の連句の特徴は、篤老が出座して自ら指導した歌仙を主体に収載し、これによって篤老の園主・統率者としての存在感、篤老園の結束力、篤老門の俳風を外部に向かって誇示する点にあったと推される。この点から言えば、倉橋連の二巻は異質であり、例外的措置による入集である。むしろ収載しない方が編纂者の意図は明白になるが、収載せざるを得ない特別な事情が存したと想像するのである。なお、木海は、発句5句、出座する歌仙二巻が入集する、「行脚」の宗匠である。次いで、出座した倉橋連の10員については、両巻で一致している。当時期の倉橋連の連衆が固定化していたことを意味しよう。

(入集句の紹介) 一割愛

倉橋の連衆の入集句は、発句192句、歌仙二巻である。前項の例に倣い引用、紹介するべきであるが、紙数の関係で割愛する。

(連衆の出自)

倉橋の連衆については、俳号による活動は作品(集)に拠り、かなりの程度明らかになる。が、島の指導者で、当時においては一目瞭然の著名人であったがために、ことさらに注記されることを欠き、俳号で示される某人が何人であったかについての解明は容易ではない。いま、『巖島奉納集三編』に入集した連衆の中で、本姓本名などが判明している人々について簡単に紹介する。

倉橋島の俳諧を主導したのは、林家一族と瀬越

家の人々であると言っても過言ではあるまい。

俳号「也籟」は、林千兵衛直温(1801-65)である。屋号は材木屋。別に六湾・三崙・恭齋などと号した。屋号は材木を商ったことに因るが、酒造業ほかをも営んだ。当家には、頼家の人々をはじめ、藩儒、さらには俳諧宗匠などの文化人の来訪が相次いだ。多能であり、自らも「詩に歌に絵に俳諧に冬籠り」と詠じている。

俳号「拾貝」は、林専助直明(1794-1822)である。也籟の兄に当たるが夭逝した。よって家督を直温が継ぐ。

俳号「維鵬」は、林鴻之助義猷である。俳号「魚目」は、維鵬の父と目される。

林家一族の中からは、このほか「竹外」「春彦」「拾彙」「物阿」「竹鷗」などの俳人を配出する。

俳号「斗山」と「篤民」は瀬越家の当主であった。当家の俳諧は、斗山-篤民-松圃-石年のように継承されたことを前述した。本項では省略する。

俳号「巨江」は、山本和十郎である。

俳号「圭甫」は、「倉橋僧」として注記されるが、宝洲山西蓮寺(真宗本願寺派)の僧・仰景である。

島ではこのほか、城光山淨福寺(真宗大谷派)、清水山白華寺(真言宗)、桂浜神社などの寺社が知られるが、いずれも俳人を配出している。

連衆は、文化面での指導者であったばかりでなく、経済的に恵まれた、資産家の一面をも覗かせている。

巖島明神・巖島神社に奉納された「巖島奉納集」について、その概要を紹介した。作品集の名のみ高く、その実体が明かされているとは思えない遺憾の意を解消するためである。その際に、とくに『巖島奉納集三編』において異常な厚遇を得ている倉橋(島)の連衆・倉橋連に焦点を合わせ、当時期の動向について検討を加えた。